

のりくら高原ミライズ



令和3年3月22日
乗鞍高原ワーキング

乗鞍高原の自然と暮らしが大好きだ。

すももの花が咲く頃、心の底から気持ちがあふれてくる。

自然を活かし、自然に生かされながらここで暮らし、
学生村やスキー、温泉や山岳観光に訪れる方をお迎えしてきた。

そんな乗鞍高原は今、居住人口の減少、観光利用者の漸減、新型コロナウイルス感染症への対応、
変わりゆく地球環境など、社会状況が大きく変化する中で様々な課題に直面している。

しかし、私達は次の時代へと歩みを止めない。

これらの困難に立ち向かうべく、目指すべき姿に向かって想いを一つにした。

— 乗鞍宣言 —

- (1) 私達は乗鞍高原の自然と暮らしが大好きだ。
- (2) 私達はこの暮らしを、未来へと持続させることが使命と考えます。
- (3) 私達は乗鞍高原を愛してこの地を訪れる人々を、心から歓迎します。
- (4) 私達は今日まで培ってきた乗鞍高原らしさをしっかり引き継ぎ、静かで落ち着いていて、
それでいて温かくて優しい山岳観光地域をつくっていきます。
- (5) 私達は地球環境問題の解決に向け、世界の先駆けとして地域単位の取組に率先して取り組みます。

— 30年後に目指す姿 —

乗鞍高原らしい穏やかで優しい自然の中で、乗鞍高原を大好きな人達が豊かに暮らし、手入れの行き届いた自然の中で、乗鞍高原の魅力に共感して訪れる人々に、温泉や地域素材を生かした食事、上質なアクティビティを提供することで、持続可能な山岳観光地域を目指します。



令和3年3月22日
乗鞍高原関係者一同

目次

(1) はじめに	1
(2) 乗鞍高原の現状と課題	3
(3) 共有する価値観及び目指すべきビジョン	5
(4) 地域共通の重点取組事項について	6
(5) 地域共通の重点取組事項の実施体制	7
(6) 重点取組事項の詳細について	9
1. 乗鞍高原からはじまる地球環境問題解決への挑戦	10
2. 住民と利用者が交流する賑わいのある地域づくりへの挑戦	11
3. 移動の障壁を取り払う環境配慮型の二次交通システム構築への挑戦	12
4. 乗鞍岳を象徴とした世界に誇れる景観形成への挑戦	13
5. 四季を通じてトレイルに人が絶えない乗鞍高原への挑戦	14
6. ワークেশョンの推進により新たな利用価値の創出に挑戦	16
7. 乗鞍高原の魅力を最大限に表現するプロモーションへの挑戦	17



(1) はじめに

デジタル化に気候変動、新型コロナウイルス感染症の蔓延と、社会が目まぐるしく変化する時代の中で、乗鞍高原はどの方向へ舵をとっていくのか、令和の時代の幕開けとともにその議論を始めました。

令和元年7月、(一社)松本市アルプス山岳郷は地元からの依頼を受け、ワークショップ及びアンケート調査を通じて「乗鞍地区の未来へ」を作成しました。これは、先人たちが守ってきた乗鞍高原の貴重な財産を再認識し、これからを生きる地域住民の思いをとりまとめた地域の共同概念です。

そして、「乗鞍地区の未来へ」作成の次のステップとして、乗鞍高原の理想像(ビジョン)やその達成に向けた基本戦略等を取りまとめたものが「のりくら高原ミライズ」です。(以下、「ミライズ」という。)これは、地元関係者を交えたワーキング、日々のコミュニケーションを通じて作り上げました。ミライズで定めた基本戦略(重点取組事項)については、毎年その取組の進捗状況を確認し、さらなるステップアップを図る必要があります。また、ミライズは観光地としての視点から乗鞍高原のあり方をまとめたものであり、現時点では日々の暮らしや住民サービスの視点については細かく整理できていないことや、引き続き社会が刻一刻と変化していくことを踏まえると、ミライズについても3~5年に1度見直す必要があると考えています。

ミライズは、乗鞍高原関係者一同が協働で地域づくりをしていくための指針として活用するものです。また、今後地域として進むべき方向性に迷いが生じたときに、今置かれている状況を再確認するために活用していきます。今後、これまでの歴史の上に立ち、乗鞍高原関係者一同が支えあい、真の協働体制を整えて事業を実施していき、中部山岳国立公園における重要な利用拠点として、また、山麓に位置する人と自然の共生が図られている居住地として、さらには、世界をとりまく地球環境問題の解決に向けた地域単位の取組を率先するエリアとして確立した持続可能な乗鞍高原を目指していきたいと思えます。



■ のりくら高原ミライズ策定までの議論の流れ

- 令和元年7月
（一社）松本市アルプス山岳郷が地元住民を対象としたアンケート及びワークショップを実施
- 令和2年1月
アンケート及びワークショップの結果を踏まえ、（一社）松本市アルプス山岳郷が「乗鞍地区の未来へ」を策定
- 令和2年7月
「乗鞍地区の未来へ」を引継ぎ、環境省業務として「乗鞍高原のあり方」について検討を開始。
- 令和2年7月～11月
のりくら観光協会を主たるメンバーとして乗鞍高原コアワーキング（地域づくり分科会、草原再生分科会、フィールド整備分科会、トイレ分科会）を開催。それぞれ2回開催し、現状の整理や課題の洗い出し等を実施。
- 令和2年12月
第1回乗鞍高原ワーキングを開催。乗鞍高原関係者一同（大野川区、のりくら観光協会、アルプス山岳郷、休暇村乗鞍高原、Blue Resort 乗鞍、アルピコ交通、長野県、松本市、環境省）で「乗鞍高原のあり方」について意見交換を行う。
- 令和3年2月
第2回乗鞍高原ワーキングを開催。乗鞍高原のあり方を示した「のりくら高原ミライズ」及び令和3年度以降の実施体制等について意見交換を行う。
- 令和3年3月以降
「のりくら高原ミライズ」を策定・公表。
乗鞍高原ワーキングを発展的に解消し、「のりくら高原ミライズ構想協議会」を設立。
のりくら高原ミライズに定める取組事項について、地域協働の実施体制により始動。

(2) 乗鞍高原の現状と課題

私たちは、乗鞍岳山麓の静寂な自然環境に囲まれて、人とつながり、温かみのある生活を営んできました。またその類いまれなる自然環境を活用し、^{そま}杣の村として生活を営み、山岳観光地として多くの利用者を迎え入れてきました。しかし、時の流れとともに状況は著しく変化し、現在、乗鞍高原は3つの危機にさらされています。

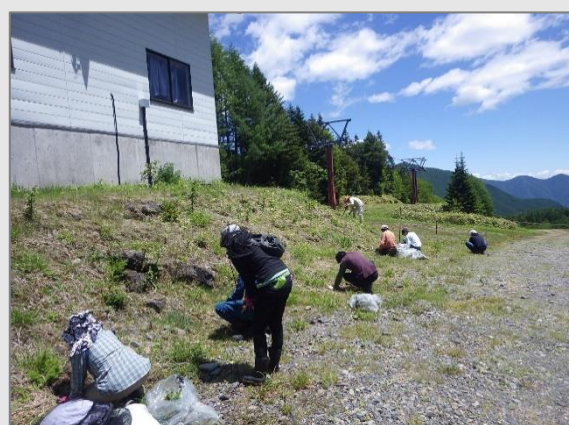
■ 乗鞍高原の3つの危機

1. 地球環境問題の影響または社会の変化等により豊かな自然環境が失われる危機

- 石油由来のエネルギーの大量消費、不要なプラスチックの使用
- 止まらない地球温暖化による積雪量の変化、高山帯の縮小
- 生活スタイルの変化による自然環境の管理放棄、シカ・外来種による生物多様性への影響



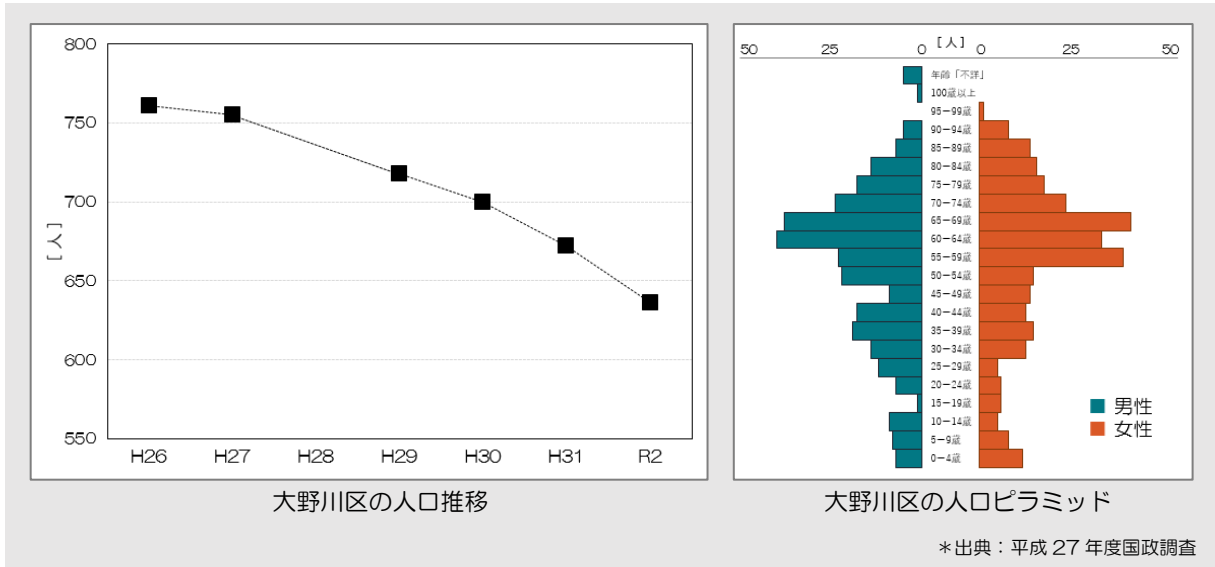
積雪量が極めて少ないスキー場



抜いても抜いても繁茂する外来植物

2. 少子高齢化、人口減少等により、安心・安全な暮らしが失われゆく危機

- 若者が職を求めて地域外へ流出
- インフラ等の生活に不可欠な機能が縮小
- 地域住人（大人も子供も）の自然とのふれあい、学びの機会が縮小 など



3. 豊かな自然観光資源を活かしきれず、山岳観光地として持続できなくなる危機

- ・一の瀬をはじめとした景観整備に手が回っていない
- ・乗鞍岳へは乗鞍エコーラインを通じて多くの利用者が訪れているが、乗鞍高原内ではトレイルやトイレなど利用環境の整備や適切な利用情報の提供ができておらず、利用者の長期滞在化や新規利用者の獲得の機会を損失している
- ・新型コロナウイルス感染症への対応 など



(3) 共有する価値観及び目指すべきビジョン

乗鞍高原が直面している3つの危機に対処し、これまで培ってきた乗鞍高原らしさをいつまでも守り、後世へと引き継ぐべく、地域で共有する価値観及び目指すべきビジョンを以下のとおり定めます。

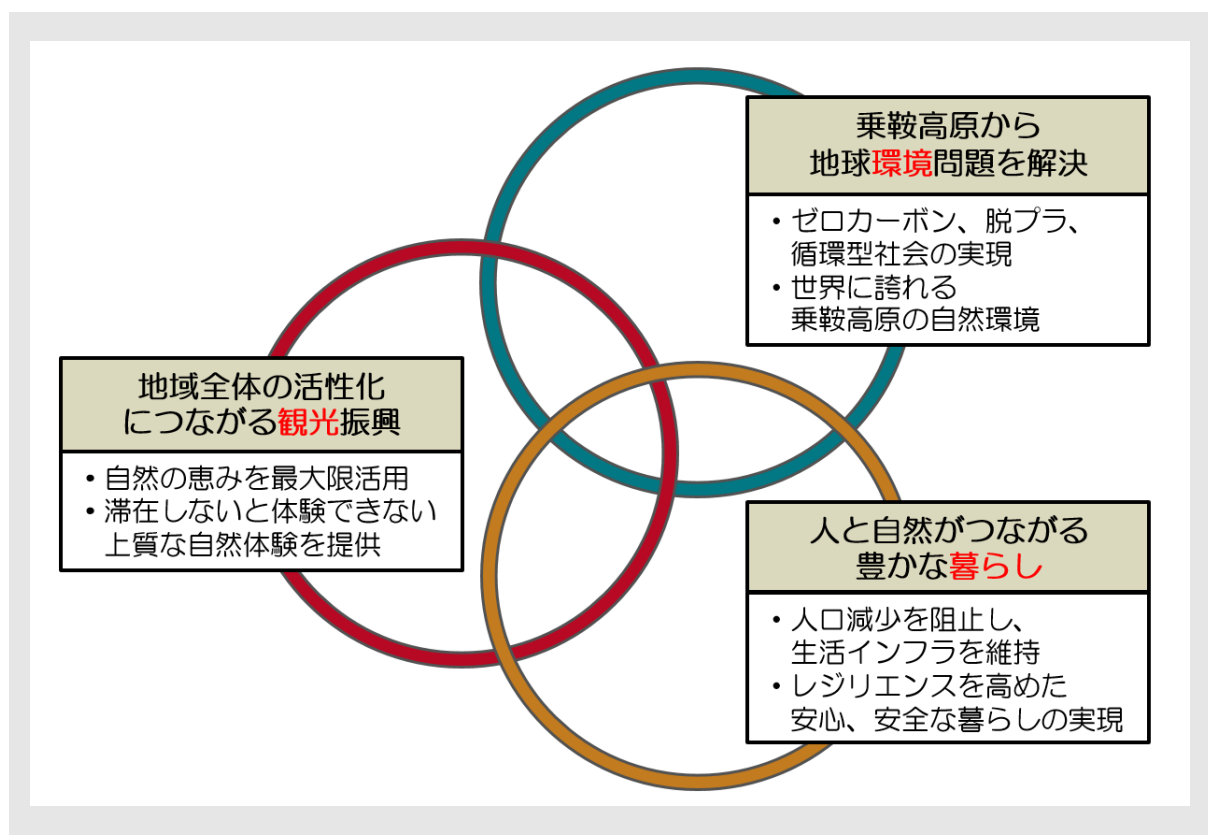
■共有する価値観

「自然を活かし、自然に生かされる、持続可能な暮らしづくり」

(「乗鞍地区の未来へ」より)

■目指すべきビジョン

「環境・暮らし・観光」の3要素を基盤とし、それぞれが相互作用しながら持続可能な地域社会を形成していく。

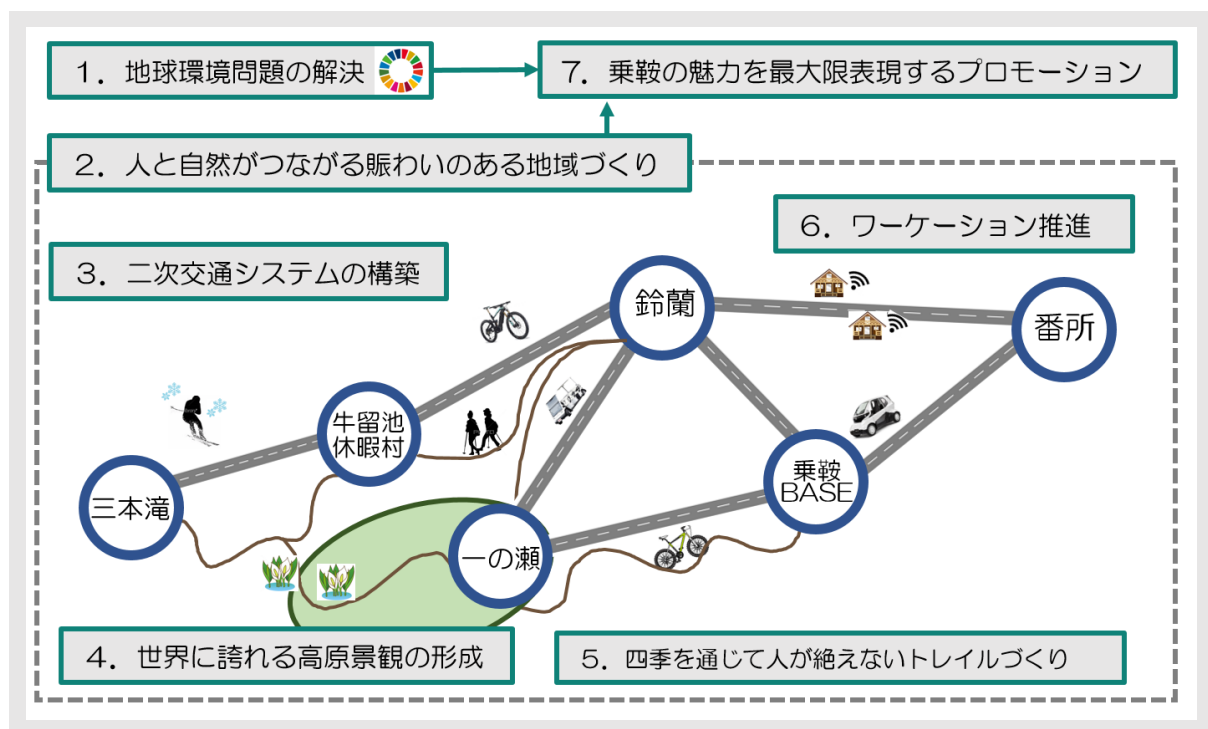


(4) 地域共通の重点取組事項について

乗鞍高原の理想像の実現に向け、以下の7つの重点取組事項を定めます。各項目の詳細については、(6)において整理しています。

ただし、以下の1～7はいずれも目指すべきビジョンにおける「環境・暮らし・観光」の3つの要素を基盤として進めるものであり、いずれの要素も欠けてはならないことを前提とします。当面は、これらについて(5)にある実施体制をもって取り組んでいきます。

1. 乗鞍高原からはじまる地球環境問題解決への挑戦
2. 人と自然がつながる賑わいのある地域づくりへの挑戦
3. 移動の障壁を取り払う環境配慮型の二次交通システム構築への挑戦
4. 乗鞍岳を象徴とした世界に誇れる景観形成への挑戦
5. 四季を通じて人が絶えないトレイルづくりへの挑戦
6. ワークেশョンの推進により新たな利用価値の創出に挑戦
7. 乗鞍高原の魅力を最大限に表現するプロモーションへの挑戦



(5) 地域共通の重点取組事項の実施体制

■重点取組事項全体の進捗管理及び方向性の確認

- のりくら高原ミライズ構想協議会において重点取組事項全体の大きな舵取りを行います。
- 会長は大野川区長、副会長はのりくら観光協会長とし、事務局は大野川区・のりくら観光協会・アルプス山岳郷・松本市・環境省の5者共同事務局とします。
- ミライズ作成時における協議会構成員は上記事務局に加え、休暇村乗鞍高原、Blue Resort 乗鞍、アルピコ交通、長野県とし、今後も取組状況に応じて乗鞍高原関係者を適宜追加できるものとします。
- 構成員一同が会する総会を年に1回開催し、全体の進捗管理及び方向性の確認、3～5年に1度ののりくら高原ミライズの見直し等を行います。

■個別重点取組事項の実行について

- 4つの分科会で役割分担しながら重点取組事項を実行します。
- 各重点取組事項に対応する実行分科会ごとに事業計画等を定め、課題の整理やアクションプランの詳細等を明記し、進捗管理していくこととします。
- 分科会には既存の協議会、委員会（任意団体含む）等の組織を充てることができます。
- 各分科会のコーディネーター及び会議参加者は、当面の間は別表のとおりとしますが、取組状況に応じて乗鞍高原関係者を適宜追加できるものとします。
- 会議に出席しなくても協議会構成員は各分科会の取組事項に積極的に参画することとします。
- 必要に応じて事業実施前後に分科会を開催し、取組状況の進捗確認、課題の検討等を行います。
- 毎年開催する協議会（総会）で、各分科会の重点取組事項の進捗報告を行います。
- 分科会横断型の取組事項については、分科会間で相互連携を図りながら実施します。
- 新しい課題等に対応するため、必要があれば分科会を別に立ち上げるなど、柔軟かつ臨機応変な対応を心掛けます。

のりくら高原ミライズ構想協議会

地域づくり分科会

1. 乗鞍高原からはじまる地球環境問題解決への挑戦
2. 人と自然がつながる賑わいのある地域づくりへの挑戦
3. 移動の障壁を取り払う環境配慮型の二次交通システム構築への挑戦
7. 乗鞍高原の魅力を最大限に表現するプロモーションへの挑戦

草原再生・景観形成分科会

4. 乗鞍岳を象徴とした世界に誇れる景観形成への挑戦

フィールド整備分科会

5. 四季を通じて人が絶えないトレイルづくりへの挑戦

ワーケーション分科会

6. ワーケーションの推進により新たな利用価値の創出に挑戦

	大野川区	のりくら観光協会 信州・乗鞍GT	アルプス 山岳郷	休暇村 乗鞍高原	Blue Resort 乗鞍	アルピコ 交通	長野県	松本市	環境省
地域づくり分科会	◎	◎	◎			○	○	◎	◎
草原再生・景観形成分科会	◎	◎	○					○	○
フィールド整備分科会	○	◎	○	○	○			○	○
ワーケーション分科会	○	◎	○					○	○

◎：コーディネーター ○：会議参加者

地域共通の重点取組事項の実施体制・各分科会の構成

(6) 重点取組事項の詳細について

乗鞍高原の理想像の実現に向けた7つの重点取組事項について、項目ごとにその詳細を定めま
す。重点取組事項の内容は、目標・実行分科会・取組の方向性とアクションプランにより構成さ
れます。

目標

⋮ 重点取組事項により実現すべき目標を示しています。

実行分科会

⋮ 重点取組事項をどの分科会で実行するかを示しています。

取組みの方向性とアクションプラン【取組主体：目標達成期間】

⋮ 目標を達成するための戦略と戦術（取組主体と目標達成期間）を示しています。



1. 乗鞍高原からはじまる地球環境問題解決への挑戦

目標

令和2年10月26日、政府は2050年までに温室効果ガスの排出を全体としてゼロにし、脱炭素社会の実現を目指すことを宣言しました。また、令和2年12月18日に松本市も続いて「松本市気候非常事態宣言 ～2050ゼロカーボンシティを目指して～」を表明しました。しかし、日本全国見渡しても、地域一体となって地球環境問題の解決に向けた取組を実践しているところのごくわずかに限られています。

そこで乗鞍高原は、地球環境の変化をダイレクトに受ける一番の当事者だからこそ、観光地的視点、経済的視点、レジリエンス的視点から世界の先駆けとして完全ゼロカーボン・脱プラ地域を実現し、世界のゼロカーボン等の推進に貢献していきます。

実行分科会

地域づくり分科会

取組みの方向性とアクションプラン【取組主体：目標達成期間】

■ゼロカーボン地域への挑戦

- ・利用拠点施設の完全ゼロカーボン化を推進する【分科会全体：10年（中期）】
- ・地域エネルギーのゼロカーボン化を推進する【分科会全体：30年（長期）】
- ・各家庭、各宿等でのゼロカーボン化を図る【大野川区・観光協会：30年（長期）】

■脱プラ地域への挑戦

- ・利用拠点施設の脱プラ化を推進する【分科会全体：10年（中期）】
- ・各家庭、各宿等での脱プラ化を図る【大野川区・観光協会：10年（中期）】

2. 人と自然がつながる賑わいのある地域づくりへの挑戦

目標

利用拠点と生活拠点が混在している乗鞍高原において、今後の利用状況の変化や人口減少等の社会状況の変化に対応するために各拠点のあり方を見直す必要が生じています。

そこで、まずは鈴蘭地区及び一の瀬地区において必要な機能を整理した上で環境に配慮した拠点整備及び拠点間連携を図ります。そのうえで、地域全体のリデザインを進め、拠点間連携を図ることで、乗鞍高原全域がリアルな自然体験の場として、また地域住民の暮らしの場として、ユニバーサルデザインの観点からも人と自然がつながる賑わいのある地域を実現します。

実行分科会

地域づくり分科会

取組みの方向性とアクションプラン【取組主体：目標達成期間】

■乗鞍高原のゲートウェイとして、鈴蘭地区（観光センター及び自然保護センター周辺）の上質化に挑戦

- ・鈴蘭地区のあり方（必要な機能、目指すべき理想像）を検討する
【分科会全体：1～2年】
- ・観光センター及び自然保護センター周辺の滞在空間の上質化を図る
【長野県・松本市：5年】

■自然、文化、歴史などの乗鞍らしさを今後も伝承できる空間として、一の瀬地区の上質化に挑戦

- ・一の瀬地区のあり方（必要な機能、目指すべき理想像）を検討する
【分科会全体：1～2年】
- ・一の瀬らしさを象徴する上質な滞在拠点を創出する【大野川区・環境省：3年】

3. 移動の障壁を取り払う環境配慮型二次交通システム構築への挑戦

目標

乗鞍高原は各利用拠点及び生活拠点が東西に長く分散して位置していますが、現状の移動手段が限定的なため、利用者及び住民の多くはマイカーによる移動が強いられています。

そこで、車をもたない若者や高齢者、インバウンドなどに移動の可能性を広げ、かつアクティビティとして移動の楽しみ方の幅を広げることを目的として、新たな環境配慮型二次交通システムを実現します。

実行分科会

地域づくり分科会

取組みの方向性とアクションプラン【取組主体：目標達成期間】

■新たな環境配慮型二次交通システムの構築への挑戦

- 各拠点間の移動の課題を整理し、E-bike、グリーンスローモビリティなどの環境配慮型二次交通システムの導入を検討する【分科会全体：2年】
- 地域をつなぐ環境配慮型二次交通システムを構築する【分科会全体：5年】



4. 乗鞍岳を象徴とした世界に誇れる高原景観形成への挑戦

目標

乗鞍高原には一の瀬をはじめ、乗鞍岳を眺望できるスポットが数多く存在するが、人の管理の手が及ばない、もしくは景観形成の連携不足により、その魅力を十分に引き出せていません。

そこで、訪れた利用者に感動を与え、住人の日々の暮らしを彩ることを目的として、一の瀬をはじめとした眺望スポットを再生し、世界に誇れる高原景観を実現します。

実行分科会

草原再生・景観形成分科会

取組みの方向性とアクションプラン【取組主体：目標達成期間】

■一の瀬において心の原風景である草原景観の再生に挑戦

- ・眺望スポット、生物多様性の保全、作業の効率化等の観点から策定した「草原再生の手引き」（令和2年度策定）におけるゾーニング計画に基づき、地域協働による草原再生作業を実施する【分科会全体：永続】
- ・3年毎にゾーニング内容を点検し、実態に合わせて見直す【大野川区・のりくら観光協会：3年毎】
- ・伐採木等を貴重な資源として有効活用できる方法を検討する【分科会全体：3年】
- ・草原再生の手引きを活用し、地域住民のさらなる参画を促すとともに、景観形成の技術を次の世代へ継承する【大野川区・のりくら観光協会：永続】
- ・地域外に活動の輪を広げ、地域を越えた持続可能な協働体制を構築する【大野川区・のりくら観光協会：10年】

■乗鞍高原全体が眺望スポットとなる世界に誇れる景観再生に挑戦

- ・乗鞍高原全体における整備すべき眺望スポットを検討する【大野川区・のりくら観光協会：1～2年】
- ・各眺望スポットにおいて景観再生のために必要な整備を実施【分科会全体：5年】

5. 四季を通じて人が絶えないトレイルづくりへの挑戦

目標

乗鞍高原内には乗鞍三滝、原生林の径など長期滞在して楽しんでもらいたい魅力的なトレイルが張り巡らされているが、利用は乗鞍高原来訪者の一部のみに限られており、その活用度は低い状況にあります。自転車利用については、乗鞍ヒルクライムレースなどの影響もあって多くの利用者が来訪しているもののヒルクライムのみ利用が主となるなど、トレイルを活用したマウンテンバイクアクティビティや自転車以外のトレイル利用に発展させられていません。

また、各利用拠点には本来快適・上質なトイレがあることが望ましいが、行政による常設のトイレ整備が追いついておらず、また乗鞍高原全体のトイレ利用環境に関する計画がないためにトイレ利用環境の適正化が十分に図られていません。

そこで、トレイル・トイレ等の自然体験フィールドの磨き上げを図り、乗鞍高原の自然や歴史、文化を体験できる上質なアクティビティを提供することで利用を多目的に促進し、四季を通じて人が絶えないトレイルを実現します。さらにトレイル利用が日々の暮らしに組み込まれるよう地域住民にとっても誇りのあるトレイルを実現します。

実行分科会

フィールド整備分科会

取組みの方向性とアクションプラン【取組主体：目標達成期間】

- トレイルの新規ルート設定などを含めた抜本的な環境整備に挑戦
- ・トレイルヘッド及びコネクトトレイルの整備により鈴蘭地区からトレイルへの導線確保する【のりくら観光協会：1～2年】
- ・周遊型のルート設定を行い、標識類による利用の誘導を図る【のりくら観光協会・松本市・環境省：1～2年】
- ・利用者の安全性の確保及び自然環境の保全が両立できる地域協働の実施体制を構築する【分科会全体：5年】

■MTB、E-bike 等を活用したサイクルツーリズムによる観光振興に挑戦

- MTB・E-bike の利用導線の設定、コンテンツの創出、標識類による利用の誘導を実施【信州・乗鞍グリーンツーリズム・アルプス山岳郷：1～2年】
- 利用者の安全性の確保及び自然環境の保全が両立できる地域協働の実施体制を構築する【分科会全体：5年】

■乗鞍高原全体のトイレ環境の適正化を行い、老若男女安心してトレイル等を利用できる環境の実現に挑戦

- 各利用拠点の入口にある「拠点トイレ」と、拠点トイレを補う「携帯トイレブース等」の配置計画を検討し、トイレ環境の適正化を図る【分科会全体：1～2年】
- 特に乗鞍高原内のトイレで利用満足度の低い一の瀬について、新拠点トイレとなる新設トイレを設置する【環境省：3年】
- トレイルの入口、トレイルマップ等に正確なトイレの位置を表示する【のりくら観光協会・環境省・松本市：永続】



6. ワークেশョンの推進により新たな利用価値の創出に挑戦

目標

昨今の働き方改革の推進や新型コロナウイルス感染症対策として、リモートワークが社会で受け入れられるようになりました。また、社会全体として分散型社会への移行が求められ、地方志向をもった潜在的な需要に対応するように、ワーク（Work）とバケーション（Vacation）を組み合わせたワークেশョン（Workation）という考え方が広まりつつあります。

そこで、温泉や大自然、ノイズレスな空間などの特性を活かし、自分と向き合い・自分を見つめなせる機会をワークেশョンという形で提供することで、これまでになかった利用価値を創出します。これにより、乗鞍高原に長期滞在する利用者数を確保し、その中から二拠点移住者や、最終的には移住者数の拡大を実現します。

実行分科会

ワークেশョン分科会

取組みの方向性とアクションプラン【取組主体：目標達成期間】

- 地域全体をワークেশョン拠点とするブランディングに挑戦
- ・ ワークেশョン対応宿舎、休憩所等を拡大する【のりくら観光協会：3年】
- ・ 各利用拠点にワークスペースの設置を検討する【分科会全体：3～5年】
- ・ 令和3年に実施予定のモニターツアー等の結果を踏まえ、体験アクティビティや地域交流等のプログラムを発展させる【のりくら観光協会：永続】
- ・ 松本市街地や他地域との連携事業を実施する【分科会全体：1～3年】

7. 乗鞍高原の魅力を最大限に表現するプロモーションへの挑戦

目標

乗鞍高原は、日本一標高の高い道路であるエコーラインにより高山帯までバス等で手軽にアクセスができることや本州随一のパウダースノーを楽しむことができる山岳観光地として、全国的な知名度に自信があります。しかし、それらだけではない、滞在するからこそ体感できる乗鞍高原の魅力を利用者へ適切に届けられておらず、乗鞍高原の来訪者に奥深い体験をしてもらうための動機づけ（プロモーション）ができていません。

そこで、他の基本戦略で磨き上げる乗鞍高原の魅力について、その時代に合った戦略的なプロモーションを実施することにより、さらなる来訪者の獲得、長期滞在化及びリピーター化を実現します。

実行分科会

地域づくり分科会

取組みの方向性とアクションプラン【取組主体：目標達成期間】

- 戦略的なアウトプロモーションの実施により、来訪者のさらなる獲得に挑戦
 - ・ 地域資源の洗い出し及び整理を行い、地域プロモーション戦略（ひいてはマーケティング戦略）を検討する【分科会全体：1～2年】
 - ・ 検討した戦略に基づき適切なコミュニケーション手段によってアウトプロモーションを実施【のりくら観光協会・アルプス山岳郷：2～3年】

- インナープロモーションを実施し、乗鞍高原の魅力や価値についての地域住民の認識統一に挑戦する
 - ・ のりくら高原ミライズの見直しと同じタイミングで、地域共通の価値観がまとめられた「乗鞍地区の未来へ」についても見直しを行う【分科会全体：3～5年毎】
 - ・ 地域関係者一同が乗鞍高原を愛し、誇りある地域づくりに貢献する【乗鞍高原関係者全員：永続】